

# 日本語の派生名詞句における「直接参与効果」について

山田昌史

## 抄 録

本稿では、英語の派生名詞に観察される直接参与効果 (Direct Participation Effect: Sichel (2010)) についての先行研究を概観し、この効果が日本語の「VN (=Verbal Noun) する」のVNを主要部として派生する名詞句についても同様に当てはまるかどうかを検証した。Sichel (2010) 等によると、英語では述語文の外項のうち、主名詞の事態を直接的に引き起こすことのできるものだけが派生名詞に継承されることが示されている。本稿では、金 (2004) が「VN する」の自他交替の分析に用いた例を題材としてそれらを名詞化し、英語と同様の効果が観察されるか検証した。その結果、日本語にも英語と同様の直接参与効果が観察されることが明らかとなった。

キーワード：派生名詞 直接参与効果 外項要素 動作主主語 日英対照研究

### 1. はじめに

本稿では、(1) のように、(人を表す) 動作主主語、使役主語のいずれも許す動詞が名詞化されると、使役主語は名詞句内に継承されるが、動作主主語は継承されないという事実を取り上げる。

- (1) a. The war / the teacher separated Jim and Tammy Fay.  
b. #The separation of Jim and Tammy Fay by the war  
c. The separation of Jim and Tammy Fay by the teacher

(Alexiadou et al. (2014):1)

(1a) の動詞 separate は、動作主主語である the teacher と使役主語である war が生じているが、その派生名詞である separation は (1c) のように動作主主語 (the teacher) とは by を伴って共起するが、(1b) のように使役主語 (the war) はそれができない。このことから、意味役割によって動詞句から名詞句へと継承され項が異なることがわかる。しかし、このような派生名詞句内に生じることのできる基体動詞の項は単なる意味役割によって説明されるのではなく、派生名詞句の主名詞が表す出来事と名詞句内に生じる項の意味関係が重要であることが明らかにされている (Marantz (1997), Haley & Noyer (2000), Sichel (2010) 等)。特に Sichel (2010) は、派生名詞には直接参与効果 (Direct Participation Effect) という意味的制約に

よって(1)の文法性の違いを説明する必要があるという。本稿では、この意味的制約について英語の派生名詞の先行研究を概観し、分析の対象を日本語の「VN (Verbal Noun) する」を形成するVNを研究対象として、日本語のVNを基盤とする派生名詞句にも同様の制約がみられるかどうか検証する。

本稿の構成は以下である。2節では英語の派生名詞に課せられる直接参与効果について先行研究を概観する。英語の研究を受けて、日本語のVNを基盤とする派生名詞句にも同様の効果が観察できるかどうか、3節で検討する。最後に4節で本稿をまとめる。

## 2. 英語の Direct Participation Effect

本節では、英語の直接参与効果についての先行研究 (cf. Pesetsky (1995)、Marantz (1997)、Harley & Noyer (2000)、Sichel (2010)) をまとめる。

英語では動詞に接辞を付加する名詞化 (nominalization) と呼ばれる語形成手段があるが、基体となる述語文と派生される名詞句が派生関係があるのか否かについては、Lees (1968)、Chomsky (1970)、Abney (1981) 等で議論され、また、派生名詞句と基体となる述語の項構造の継承とアスペクト特性については Randall (1981)、Grimshaw (1990) 等で詳細に議論されている。Pesetsky (1995) は、以下のような基体述語が自他交替を許す場合、そこから形成される名詞句が必ずしも基本述語の項構造を継承しないことを観察している。

- (2) a. Tomatoes grow.  
b. Bill grows tomatoes.  
c. the growth of tomatoes  
d. \*Bill's growth of tomatoes
- (3) a. The curtain dropped.  
b. The mechanism dropped the curtain.  
c. the drop of the curtain  
d. \*the mechanism's drop of the curtain
- (4) a. The money returned.  
b. The thief returned the money.  
c. the return of the money  
d. \*the thief's return of the money (Pesetsky (1995): 79)

(2)-(4)の例では、派生名詞句の基体となる動詞は自他の交替を許すが、theme項を伴って非対格自動詞からの派生名詞句は許すが、他動詞からのそれは派生されない。その一方で、他動詞としての用法を持つが自動詞としての用法を持たない動詞では、他動詞からの派生名詞が許される。

- (5) a. \*Tomatoes cultivate.  
 b. Bill cultivates tomatoes.  
 c. the cultivation of tomatoes  
 d. Bill's cultivation of tomatoes
- (6) a. \*The town destroyed.  
 b. The bomb destroyed the town.  
 c. the destruction of the town  
 d. the bomb's destruction of the town
- (7) a. \*Herculaneum buried.  
 b. The volcano buried Herculaneum.  
 c. the fortuitous burial of Herculaneum  
 d. the volcano's fortuitous burial of Herculaneum (Pesetsky (1995): 80)

(5)-(7)の動詞は、他動詞としての用法のみを持つが、これらの動詞を名詞化するとそれぞれの(d)の例のように、基体動詞の項構造に含まれる2つの項が継承されている。このように、基体となる他動詞が自他交替を許すか否かによって名詞化された際に他動詞の主語となる項が名詞句に継承されるか否かに違いが生じている。このような事実に対して、Pesetsky (1995)は、(2)-(4)のように自他交替を許す動詞の他動詞は、その語基 (root) 要素に CAUSE という空の形態素が付属して  $\sqrt{\text{grow}}+\text{CAUSE}$  という形態構造を持つと仮定している。そしてこれに名詞化接辞がつくと、‘… a derivational suffix cannot attach to a zero-derived word (Myers (1984:65-66))’ という Myers の一般化に違反するため、(2d)-(4d)のような他動詞からの名詞化は不可能であるとしている。その一方で、(5)-(7)の例では、他動詞が語彙的に他動性を含んでおり、また、対応する自動詞形がないため、+CAUSE という空の形態素が動詞に付属していない。そのため、基体動詞に名詞化接辞がついても Myers の一般化に違反せず、基体動詞の2つの項を継承して名詞化されると分析している。

その一方で、Marantz (1997)は、(2)-(4)のような自他交替を許すが、名詞化されると外項要素を名詞の内部に生じさせることができないのは、基体となる品詞が中立である語幹 ( $\sqrt{\text{grow}}$ ) が内的使役 (internally caused : Levin & Rappaport (1995)) という意味的特徴を持つ一方で、(5)-(7)のような他動詞のみをもつ語幹 ( $\sqrt{\text{cultivate}}$ ) は外的使役 (externally caused) であるとし、Pesetsky の形態素の特徴からの分析とは異なり、語幹の語彙意味的特徴から文法差を説明している。

しかし、Pesetsky (1995) や Marantz (1997) の分析では捉えられない事実があることを Harley & Noyer (2000) が指摘している。

- (8) a. The balloon exploded  
 the balloon's explosion  
 b. The army exploded the bridge.

- the army's explosion of the bridge  
c. Wealth accumulated.  
the wealth's accumulation  
d. John accumulated wealth.  
John's accumulation of wealth (Harley & Noyer (2000): 12)

これらの動詞は自他交替を許すため、grow と同様に名詞化された際、外項要素を継承しないことが予測されるが、(8) のどの例も文法的である。このような派生名詞について Harley & Noyer は主名詞の前位置を占める属格項の意味的働きが肝要であるという。以下の例と (8d) の例を比較する。

- (9) a. Dust accumulated on the table.  
b. The accumulation of dust on the table  
c. #John's accumulation of dust on the table (Harley & Noyer (2000): 19)

(8d) では、富の蓄積という行為の実現に John が直接関与するのに対して、(9c) では塵の蓄積には John が直接関与することがない。このことから、自他交替が可能な動詞の他動詞では、動詞が表す事態の成立に直接関与する動作主のみ、派生名詞に継承されることがわかる。このことは以下の例にもみられることが指摘されている。

- (10) a. Adultry separated Jim and Tammy Faye.  
b. #adultry's separation of Jim and Tammy Faye.  
c. The Cold War separated E. and W. Germany  
d. #the Cold War separation of E. and W. Germany  
e. The 19th century's unified the principalities.  
f. # the 19th century's unification of the principalities.  
(Harley & Noyer (2000): 19)

Harley & Noyer は (10b)(10d)(10f) の名詞句には容認性に揺れがあるものの、「外的使役 (externally caused) : Haley & Noyer (200): 19」という意味的要素が動作主項を基体となる他動詞から継承するか否かに関与するとしている。

また、Sichel (2010) は以下のような例を挙げている。

- (11) a. the sun's illumination of the room  
b. The sun illuminated the room.,  
(12) a. #the sun's postponement of the hike  
b. #the sun postponed the hike. (Sichel (2010): 14-15)

(11a) では太陽が部屋を照らす直接的な原因となっているが、(11b) では太陽がハイキングの延期の直接的な原因とはならない。「延期」することはその決定をする「人間」だけであるとされる。Sichel はさらに、これまで議論してきた名詞前位置に生じる属格を表すものだけでなく、by を伴って生じる名詞句にも同様のことが観察されるとしている。

- (12) a. the hurricane's destruction of our crops  
b. the destruction of our crops by the hurricane  
c. the hurricane's devastation of ten coastal communities  
d. the devastation of ten coastal communities by the hurricane
- (13) a. #the approaching hurricane's justification of the abrupt evacuation of the inhabitants  
b.# the justification of the abrupt evacuation of the inhabitants by the approaching hurricane  
c. authorities' justification of the rapid evacuation of the inhabitants  
d. the justification of the rapid evacuation of the inhabitants by the authorities

(Sichel (2010): 15-16)

(13) では、原因となる approaching hurricane は属格、by 句いづれも、justification を主要部とする名詞句内に生じることができない。その一方で、inhabitants は justification の出来事を直接的に引き起こし、それが表す結果状態を引き起こす主体となる。どちらも外的使役となりうる名詞句であるが、上記のような文法差が生じるのは、主名詞の表す出来事に直接的な参与 (direct participation : Sichel (2010): 16) があるか否かの違いであるとされる。また、以下の例にみられるように、直接参与条件は派生名詞にみられるもので、述語には観察されないものであることが指摘されている。

- (14) a. The exercise expanded her interest in syntax.  
b. #the exercise's expansion of her interest in syntax
- (15) a. The weather altered their plans.  
b. #The weather's alternation of their plans disappointed Jim and Tammy Faye.

(Sichel (2010): 17)

Sichel (2010) は、(14a) と (15a) の述語では、主語が expand her interest の直接使役であり、時間的、空間的に主となる出来事からその使役事態が切り離されている一方で、(14b) と (15b) の派生名詞句では、その 2 つの出来事が同時であり、同空間で行われる

と述べている。このことから、派生名詞句の生成には述語よりもその出来事の起因者として生じる要素に厳しい意味的制限がかかるとされる。これをまとめて、Sichel は派生名詞句内に外項要素が生じる際は、以下の条件がかかることを主張している。

(16) a. If a simple event includes an external argument, the participation of the argument is co-temporal with the initiation of the event.

b. Corollary: When the participation of the external argument is not co-temporal the event is a complex event.

(Sichel (2010): 20)

つまり、派生名詞句内で外項要素として許されるためには、主名詞と theme 項が引き起こす出来事に外項要素が直接的に参与し、使役行為と主動作が一体化した出来事として行われることが必要であるという。このことから、外項要素を許す派生名詞は単一の出来事を表し、その出来事の起因者として外項要素がその出来事の発生に直接的に参与することが必要である。

本稿では、(16b) の基準を用いて日本語の VN を分析対象として直接参与効果が日本語の派生名詞にも認められるかどうか、次節で検証する。

### 3. 日本語の直接参与効果

前節で、英語の派生名詞に見られる直接参与効果について概観した。本節では、日本語の派生名詞を観察し、この効果が観察されるか検証する。本稿では、日本語の「VN する」の VN (=Verbal Noun) の位置に生じる二字漢字名詞を検証の対象とする。そこで、まず、日本語の「VN する」の自他交替についての先行研究をまとめる。

#### 3.1. 日本語の「VN する」の自他交替

本節では、日本語の「VN する」の自他交替に関する先行研究(影山(1996)、金(2004))をとりあげ、「VN する」を中心とする述語文の自他交替がどのような意味的制限によって形成されるか概観する。

影山(1996)は、以下のような「VN する」の自他交替の事実を指摘している。

(17) a. ナポレオンがフランス領土を拡大した。

b. フランス領土が拡大した。

c. コピー機を使って、図面を拡大した。

d. \*(コピー機で) 図面が拡大した。 (影山(1996): 203)

(17) の例から、影山は「他動詞用法と自動詞用法では自動詞用法のほうに意味的・認知的制限が観察される(影山(1996):203)」と述べている。このような分析に対して、金(2004)は、影山の分析には以下のような反例があることを指摘している。

- (18) a. イラクとの国交が回復した。  
b. ヨルダンがイラクとの国交を回復した。  
c. 景気が回復した。  
d. \*経済学者が景気を回復した。(金(2004): 91)

(18c)と(18d)の例では、自動詞は許されるが他動詞は許されない。このことから、自動詞用法の方が他動詞用法より派生が制限されるという分析が一様に当てはまらないことがわかる。金(2004)はこのような自動詞の用法が許され、他動詞の用法が許されない「VNする」に着目して、この形式の成立要件を議論している。以下の例を観察する。

- (19) a. ヨルダンとイラクの国交が回復した。  
b. \*アメリカがヨルダンとイラクの国交を回復した。  
(20) a. 患者の意識が回復した。  
b. \*医者が患者の意識を回復した。

(18b)と(19b)の文法性を比較すると、文法的な(18b)の例では「国交」と主語の「ヨルダン」の間には所属関係が成立しているのに対して、非文法の(19b)の例では「国交」と「アメリカ」の間には所属関係が成立しない。同様に(20b)の例でも、「意識」と所属関係が成立しているのは主語の「医者」ではなく属格の「患者」である。このように、主語と目的語の主名詞との間に所属関係がなければ、「VNする」の他動詞の形式が許されず、自他交替が不可能であると分析される。金(2004)はこのような「VNする」の他動詞の形式にみられる主語と目的語の所属関係のことを「再帰性」と呼んでいる。他にも以下のような「再帰性」がみられる例を挙げている。

- (21) a. 肺がんが発症した。  
b. 患者が肺がんを発症した。  
c. \*過度な喫煙が肺がんを発症した。  
(22) a. 態度が一変した。  
b. その政治家は態度を一変した。  
c. \*花子が太郎の態度を一変した。(金(2004): 93-94)

そして、「VNする」の他動詞形の成立に必要な再帰性を以下のように定義している。

- (23) 再帰的な関係とは、目的語として「主語以外の者の存在を排除する」性質であり、具体的には、目的語が主語の身体部位や所有物、組織における上下関係のようなモノ名詞の場合、あるいは主語が携わるイベントのようなコト名詞の場合である。

(金 (2004: 97))

次節では金 (2004) が用いた上記の例から VN を抽出して名詞化し、英語と同様な効果が見られるか検証する。

### 3.2. VN を主名詞とする派生名詞句

本節では、前節でまとめた影山 (1996)、金 (2004) の「VN する」の例を名詞化して Sichel (2010) が提案する直接参与効果が日本語の派生名詞句にも観察されるか検証する。

まず、以下のように (17) を名詞化した例を観察する。

- (24) a. ナポレオンのフランス領土の拡大
- b. フランス領土の拡大
- c. コピー機を使つての図面の拡大
- d. (コピー機での) 図面の拡大

問題となるのは、(24d) の文法性である。(24d) は (17d) の自動詞用法から派生したもので、「図面の」が「拡大」の外項として解釈を持つことを意図しているが、その解釈はなく (24c) と同じ解釈であると思われる。このことから、(17d) の自動詞用法からは外項を継承して派生名詞句を形成できないといえる<sup>1</sup>。

次に、(18)-(20) の「VN する」を含む述語文からの名詞化の事実を観察する。

- (25) a. イラクとの国交の回復
- b. ヨルダンのイラクとの国交の回復
- c. \*アメリカのヨルダンとイラクの国交の回復
- (26) a. 景気回復
- b. \*経済学者の景気回復
- (27) a. 患者の意識回復
- b. \*医者 of 患者の意識回復

これらの「回復」を主名詞とする例では、(18)-(20) の述語文の例と同じ文法性を示している。(25)-(27) の非文法の例では、外項要素である「アメリカの」「経済学者の」「医者 of の」が「回復」の直接的な参与者となっていないと分析できる。例えば、(25c) では、国交の回復をするのはヨルダンとイラクであつて、この出来事に「アメリカ」は直接参与せず、ヨルダンとイラクの国交回復の起因者の働きをしている。同様に、(26c)(27c)

<sup>1</sup> このような自動詞の外項要素が名詞化によって、名詞句内部でなぜその資格を失うのかについての考察は、今後の課題とする。



も、外項要素が「回復」の直接的な参与者になっていないことから非文法であると説明できる。一方、(25b)の「ヨルダン」と(27a)の「患者」はそれぞれ、「回復」の直接的な参与者である。つまり、(25)-(27)の例から日本語のVNを基体とする派生名詞句には英語と同様な直接参与効果があると考えられる。

さらに、(21)-(22)の例の派生名詞句を検討する。

- (28) a. 肺がんの発症
  - b. 患者の肺がんの発症
  - c. \*過度な喫煙の肺がんの発症
- (29) a. 態度の一変
  - b. その政治家の態度の一変
  - c. \*花子の太郎の態度の一変

これらの例も同様に、外項要素が「発症」「一変」の直接的な参与者となっている(28b)と(29b)は文法的であるが、主動詞が表す出来事の起因者として別の使役事態が想定される(28c)と(29c)は非文法である。これらの例からも日本語のVNを基盤とする派生名詞は英語と同様の直接参与効果が働いているといえる。

つ　ここで問題となるのが、3.1節で述べた金(2004)が「VNする」の自他交替に関わる再帰性との関係である。再帰性が成立する事態を詳しくみると、主語と目的語の主名詞との結びつきが必須であることから、使役行為と動詞が描く事態が同時に起こる必要があると思われる。つまり、再帰性がみられる事態では、他動詞の主語である行為者または使役者が、動詞が表す事態に直接的に参与する必要があると思われる。さらなる検証が必要だが、金(2004)の「再帰性」の概念は、Sichel(2010)の(16b)の公理に適うものであると考えられる。

本節では、日本語の「VNする」の述語文からの派生名詞句をとりあげ、それに英語と同様の直接参与効果が観察されるかどうかを検討した。その結果、日本語のVNを基盤とする派生名詞句にも英語と同様の直接参与効果があることが明らかになった。

次節で本稿をまとめ、今後の課題を述べる。

#### 4. 結語

本稿では、英語の派生名詞句に見られる直接参与効果とよばれる意味的制限についての先行研究を概観し、その効果が日本語の「VNする」のVNを基盤とする名詞句にも観察されるかどうかを検証した。その結果、日本語の派生名詞句にも英語と同様の効果が観察されることが明らかとなった。

今後の課題として、2点挙げられる。ひとつは、本稿で扱ったデータの範囲が非常に限られたものであるため、さらに多くの作例や検索例などを用いて検証する必要があることである。もうひとつは、事実の観察にとどまり、直接参与効果が生じる理論

的な基盤を追究できなかったことである。これら2つを今後の研究課題としたい。

#### 参考文献

- Abney, P. Steven. (1980) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*.  
Doctoral Dissertation, MIT.
- Alexiadou, Artemis, Mariangeles Cano, Gianina Iordachioaia, Fabienne Martin  
and Florian Schafer. (2014) Direct participation effects in derived nominals.  
*Proceedings of the 48th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 17-  
32.
- Chomsky, Noam (1970) Remarks on nominalization, In Jacobs, A. Roderick and  
Peter S. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*,  
184-221. Waltham, Mass.: Ginn.
- Grimshaw, Jane. (1990) *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Harley, Heidi & Rolf Noyer (2000) Formal vs. encyclopedic knowledge: Evidence  
from nominalization. In Bert Peters (ed.) *The Lexicon – Encyclopedia Inter-  
face*. 349-374. Amsterdam: Elsevier Press.  
([http://pluto.huji.ac.il/~isichel/Event\\_Structure\\_Constraints.pdf](http://pluto.huji.ac.il/~isichel/Event_Structure_Constraints.pdf))
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版
- 金英淑 (2004)「「VN する」の自他交替と再帰性」『日本語文法』4 卷 2 号 89-102. 日本  
語文法学会
- Lees, B. Robert. (1968) *The Grammar of English Nominalizations*. The Hague:  
Mouton.
- Levin, Berh & Malka, Rappaport-Hovav (1995) *Unaccusativity*. Cambridge,  
Mass.: MIT Press.
- Marantz, Alec (1997) No escape from syntax: Don't try morphological analysis in  
the privacy of your own Lexicon. *University of Pennsylvania Working Pa-  
pers in Linguistics*, 4.2, 201-225.
- Myers, Scott. (1984) Zero-derivation and inflection. *MIT Working Papers in Lin-  
guistics* 7, 53-69.
- Pesetsky, David. (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. Cambridge,  
Mass.: MIT Press.
- Randall, H. Janet. (1981) Inheritance. In Wilkins, Wendy (ed.), *Syntax and Se-  
mantics 21: Thematic Relations*, 129-146. New York, NY.: Academic Press.
- Sichel, Ivy (2010) Event-Structure constraints on nominalization. In Alexiadou,  
Artemis and Monika Rathert (eds.), *Nominalizations across Languages  
and Frameworks*. 159-198. Berlin: Mouton de Gruyter. ([http://pluto.huji.ac.il/~isichel/Event\\_Structure\\_Constraints.pdf](http://pluto.huji.ac.il/~isichel/Event_Structure_Constraints.pdf))

(2020 年 1 月 9 日 受理)